

梅花女子大学看護学部紀要  
第5号（2015年3月20日刊）抜刷

2013年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修報告  
The Report of Global Health Nursing Overseas Practicum in Australia

張 曉 春  
田 代 麻 里 江

# 2013年度国際看護学演習におけるオーストラリア 海外看護研修報告

The Report of Global Health Nursing Overseas Practicum in Australia

張 曉 春<sup>1)</sup> 田 代 麻里江<sup>1)</sup>

ZHANG, Xiaochun TASHIRO, Marie

キーワード：海外看護研修 国際看護 多文化看護 オーストラリア

Key words：Overseas Nursing Practicum, Global Health Nursing, Multi-cultural Nursing, Australia

## 要 約

2013年8月、本学は看護学部開設以来はじめての海外看護研修をオーストラリアにて実施した。当該海外看護研修は、4年生前期選択科目である国際看護学演習の一環として位置づけられている。この海外看護研修は、多文化看護や国際看護の学びを目的とする研修ではあるが、異国の地での研修は、学生たちが専門知識を得るのみにとどまらず、多文化の視点から看護を見つめることで固定観念から解放され、困難な環境を通して潜在的な自己能力を発見する機会となっていた。海外看護研修は、学生にとって、一人の人間としての成長、そして看護職のキャリア開発へとつながる貴重な体験となっていることがわかった。課題としては、海外離れの傾向がある若い世代の学生たちの中に、海外看護研修を受けようとする学生が少ないということである。

### I. はじめに

国内外で急速に加速する社会のグローバル化現象への対応として、本学では国際感覚を身につけるための看護専門科目を複数提供している。その一つである国際看護学演習は海外看護研修を含む科目であり、4年前期に設けられた2単位の選択授業である。2010年に本学の看護学部を開学した後、2013年に

初めて実施した国際看護学演習とその一環として実施した海外看護研修について報告する。

### II. 国際看護学演習の科目概要および履修要件

国際看護学演習の学習目標は、「異なる文化圏での研修を通して、看護をグローバルな

---

1) 梅花女子大学 看護学部 看護学科

視点から概観するとともに、社会文化システムの看護との関係性について理解を深めること」である。授業は、渡航前事前学習・海外研修・帰国後学習の3部構成となっている。また、国際看護学演習の履修には、多文化共生看護学と国際看護学の2科目の選考履修要件が課せられており、それらの学び（講義、グループワーク、国内フィールドスタディ）の集大成として国際看護学演習がある（表1）。その他の要件として2013年度は、英語事前学習（TOEFL-ITPスコアの提出）、オーストラリア研究所（追手門学院大学）の講義受講、英会話グループ学習を課した。渡航前事前学習・帰国後学習の詳細については表2に記した。

表1 本学の看護専門分野における国際教育プログラム(2013年度)

開講時期	科目名	単位数	必修/選択
3年前期	多文化共生看護学	2	選択
4年前期集中	国際看護学	2	選択必修*
4年前期集中	国際看護学演習**	2	選択

\* 履修要件：多文化共生看護学と国際看護学を修得していること

なお、渡航前学習と並行して、学生の海外看護研修における危機管理にも力を入れた。渡航前に学生たちに健康状態および既往歴について尋ねる質問票への記入を依頼し、現地

の生活に支障がないかを確認した。また、体調の自己管理が特に必要である学生に対しては本人のみならず保護者と連絡をとり予防と対策を話し合った。学生は全員海外旅行保険に加入して渡航した。

### Ⅲ. 海外看護研修の研修地の選定

本学で初めて実施する海外看護研修(以下、海外研修とする)として、オーストラリア・ビクトリア州にあるモナシュ大学ペニンシュラ・キャンパスを選んだ。モナシュ大学ペニンシュラ・キャンパスは、看護学を中心とした保健医療関連の教育に力を入れており、日本の看護学生および看護職者向けの研修プログラムを実施している。モナシュ大学の日本プログラム・コーディネーターである下稲葉かおり講師と綿密な連絡を取りながら準備を進めた。

ホストファミリーのマッチングについては、モナシュ大学看護助産学科がモナシュ大学の法人 Monash College Pty Ltd に依頼して行われた。ホストファミリーの募集、選別、事前アンケート、ホームステイ宅の訪問、データ分析と確認、査定、実績の確認の7段階を通してホストファミリーは慎重に選考されている。

表2 2013年度 国際看護学演習の構成(渡航前学習・海外研修・帰国後学習)

回	date		内容	コマ数
1	4/25	木	コースオリエンテーション、渡航手続きに関する確認	1
2,3	5/17	金	旅行代理店担当者による渡航手続き&オーストラリア入国に関する説明、質疑応答	2
4	6/20	木	学生課題発表:オーストラリア&メルボルンの概要(歴史、地理、政治、文化、民族(移民)、言語)、英会話	1
5			学生課題発表:オーストラリアの医療指標・医療事情、看護事情・外国人看護師、英会話	1
6	7/26	金	学生課題発表:オーストラリアの多文化医療(移民・外国人患者へのサポートシステム)、英会話	1
7			学生課題発表:オーストラリアの生活・食文化、ホームステイとその成功の秘訣、英会話	1
8,9	8/23	金	渡航前オリエンテーション	2
10~26	8/27	火	海外研修へ出発	
	9/5	木	海外研修より帰国	17
27,28	9/17	火	海外研修プログラム評価 & 学生自己評価	1
			学内報告会準備	1
29	9/20	火	学内報告会準備	1
30			学内報告会実施	1
				30

#### IV. 研修地の概要

本研修は、オーストラリアの南部に位置するビクトリア州フランクストン市にて実施した。以下に、研修先であるオーストラリアおよびモナシュ大学ペニンシュラ・キャンパスのあるフランクストンについて概要を紹介する（図1、表3、表4）。

##### 1. オーストラリアの概要



図1 オーストラリア地図  
（日本外務省のホームページより作成）

表3 オーストラリア連邦について

位置	東経113～154度, 南緯10～44度
首都	キャンベラ(人口約37万人)
面積	7,692,024km <sup>2</sup> (日本の約20倍)
人口	約2,294万人
人口増加率	1.07%
民族	住民の80%以上がヨーロッパ系の白人、アジア人が約12%、アボリジニなどが約2%。移民は全体の約2割、出身国はイギリス、ニュージーランド、中国、インド、イタリア、ベトナムが多い。
言語	英語
宗教	キリスト教61%、他の宗教7.2%、無宗教22%
GDP	10億USドル
産業	サービス産業、農業、工業セクター

\*豪州統計局2012年、2013年統計データより  
IMF・World Economic Outlook Databases (2014年4月版)  
Religion in Australia as declared in the Census (2011)  
CIA・The World Factbook

モナシュ大学ペニンシュラ・キャンパスのあるフランクストン市は、ビクトリア州の州

都であるメルボルンから列車で約1時間南下したところに位置する。海岸沿いの風光明媚な都市である（表4）。

表4 フランクストン市について

創立	1854年
位置	ビクトリア州 ポートフィリップ湾の東海岸の南に位置
面積	20.8km <sup>2</sup>
人口	129,000人(2013年)
民族	イギリス、イタリア、ベトナム、中華人民共和国、ニュージーランド

フランクストン観光センターのホームページより

##### 2. モナシュ大学及びモナシュ大学看護助産学科

モナシュ大学(Monash University)は1958年創立され、オーストラリア・メルボルン近郊のクレイトンに本部をおく州立の大学である。オーストラリアの研究重点8大学(Group of Eight)に属する総合大学であり(The Group of Eight, 2011)、2013年タイムズが発行する世界大学ランキング(The Times Higher Education Supplement)の「The world top 200 universities」に91位とされた(The Times Higher Education Supplement, 2013)。学生数は63,000人を超えており、留学生数は約21,000人である。世界各地にマレーシア、南アフリカのヨハネスブルグを含む8つのキャンパスがあり、ロンドンとイタリアのプラトにセンターを持っている。

モナシュ大学看護助産師科はペニンシュラ・キャンパスにある。ペニンシュラ・キャンパスは比較的小規模であるがモナシュ大学の中でくつろいだ雰囲気のカンパスの一つである。看護助産師科はオーストラリア国内外において学部及び大学院教育を提供しており、ケアの実践を向上するために看護・助産の分野においても様々な研究を行っており、エビデンスに基づいた研究業績を数多くあげている(Monash University, 2012)。

### 3. オーストラリア看護・教育の状況

#### 1) オーストラリアのヘルスケアシステム

オーストラリアは19世紀に6つの地域に分かれたイギリスの植民地であったが、1901年連邦政府が設立され、6つの州及び2つの特別準州が設立されるようになり、それぞれ議会を持っている。ヘルスケアシステムにおいて、連邦政府及び州政府の役割が異なっている。連邦政府は国民の健康、保健に関する意思決定においてリーダーシップをとり、州政府は公立病院におけるケアの統制と管理を行っている。オーストラリアはメディケアという公的医療保障制度によって、国民が医療サービスを安価に享受できる一方、民間の医療保険への加入も進められている。全ての医療サービスは連邦政府が管理しているメディケアによって提供されており、入院サービスが全体の約38%を占めており、他の医療サービスが約20%を占めている。財源が限られた状況のため、平均在院日数は僅か3.1日、日本の約1/3となる(Australian Institute of Health and Welfare Canberra, 2011)。

オーストラリアは多民族国家であるため、すべての病院に移民者数の多い14ヶ国の言語での対応が義務付けられている。英語が話せない患者の通訳サービスは病院の負担で行なわなければならない。

#### 2) 看護教育

オーストラリアはイギリスの植民地であったため、イギリス方式の看護師養成が行われてきたが、1970年代はオーストラリアの看護師が教育水準の違いによってイギリスやアメリカで看護師資格の取得が困難になる事態が生じた。そのため、看護教育における大学教育の必要性が認識されるようになり、1993年から看護師教育を3年制の大学教育に一本化された。なお、学士課程のほか、大学院教育(修士課程1-2年間、博士課程2-5年間)も行われている。

オーストラリアでは、看護師免許は国家資格ではなく、大学を卒業し看護の学位が得られ、各州の看護登録局に登録すれば看護師の免許が交付され、毎年の更新が必要である。5年以上の空白がある場合、新規登録になり、リフレッシュコースの履修が要求される。

看護師の専門性も求められており、認定看護師(Clinical Nurse Specialist)は内科、外科専門で病院ごとに認定し、Clinical Nurse Consultantは糖尿病専門、感染症専門であり、各地域で認定している。専門ナースになるには卒後働きながら1年コースを修了しなければならない。卒後1年間は各病院が提供する新人研修コースに応募して自己研鑽をするための臨床実践教育をうけやすい環境が整備されている。Clinical Nurse Practitionerは大学院の修士が基本であり、検査の指示や薬の処方ができる点はアメリカと似ている。

オーストラリアにおいて、高齢化社会が進んでいるため、約12%の看護師が高齢者ケアに従事し、53%の看護師は病院勤務となっている(モナシュ大学講義より)。

#### 3) オーストラリア先住民

オーストラリアの先住民はオーストラリア大陸に5~8万年前から存在しており、500以上の民族のグループと250以上の言語を持っており、環境と調和しながら生活していたが、1788年からイギリスによる植民地化によって、戦争、虐殺、疾病の流行を発生したため、多くの先住民が命を落とした。1869年から1969年まで約100年の間、先住民アボリジニ及びトレス海峡諸島民の子どもたちを親元から強制的に奪い、白人の家族の中で白人と同じように育て、彼らのアイデンティティを失わせるといった強制隔離政策が実施され、これらの子どもたちが"Stolen Generation"(盗まれた世代)と呼ばれている。過去の先住民への政策に対し、2008年2月13日の議会で政府が先住民に初めて公式

に謝罪し、オーストラリア国内で多くの関心を集めた (Stephen de Tarczyński, 2008).

また、1877年以降イギリス文化が導入されてきたことにより、以前は流行していなかった感染症が蔓延し先住民の健康状態に影響を与えただけでなく、原住民社会の過疎化及び社会的混乱をもたらし、家庭内外の暴力、虐待、薬物乱用、グリーフと喪失、失業、ギャンブル、高失業率等の社会問題が生じている (モナシュ大学講義より).

## V. 海外研修の実際【学生の学びより抜粋】

### 1. プログラムの構成

海外研修の日程は、2013年8月26日から9月5日であり、今回の参加者は学生4名と

科目担当教員2名の計6名であった。表5に海外研修のスケジュール詳細を記す。

### 2. 学生が海外研修を通して得た学び

#### 1) オーストラリアの看護

今回の海外研修に参加し、オーストラリアの看護師について学ぶことができました。勤務体制は3交代で、パートタイムの看護師や夜勤専門看護師がいることを知りました。オーストラリアも看護師不足の問題がありますが、勤務数が少なくても、パートタイムの看護師が多くいるため残業がないこと、残業があったとしても引き継ぎで行ってもらえることを学びました。そのため、協働しながら疲労等で自分らしさを失わずに働くことができる環境にあるということを実感

表5 2013年度海外研修プログラムの構成

日程	研究施設	内容	
8/26(月)	日本を出発	16:00	関西国際空港 集合
		18:05	関西国際空港 CX507 出発
		21:00	香港国際空港 到着
		23:35	香港国際空港 CX105 出発
8/27(火)	メルボルン空港到着後 バスでモナシュ大学へ移動	13:00	メルボルン空港 到着
		14:30-16:30	オリエンテーション及び歓迎パーティ 各ホストファミリーに迎えてもらう
8/28(水)	モナシュ大学	9:00-11:00	オリエンテーション・キャンパスツアー
		11:30-13:00	英会話講義
		14:00-15:30	講義1 オーストラリアヘルスケアシステム
8/29(木)	フランクストン病院 モナシュ大学	9:30-13:00	病院見学
		14:00-15:30	講義2 文化と看護
8/30(金)	モナシュ大学	9:00-11:00	講義3 オーストラリア先住民の健康1
		11:30-13:00	講義4 オーストラリア先住民の健康2
		14:00-15:30	自由行動
8/31(土)	メルボルン周辺		学生主体メルボルン研修
9/1(日)	メルボルン周辺		ホストファミリーと自由行動
9/2(月)	モナシュ大学	9:00-11:00	講義5 緩和ケア
		11:30-13:00	講義6 死を迎える患者とのコミュニケーション
		14:00-15:30	モナシュ大学の看護学生と交流
9/3(火)	ペニンシュラ緩和ケア・ユニット	9:00-13:00	緩和ケア・ユニット見学
		14:00-15:30	振り返り
9/4(水)	モナシュ大学	9:00-13:00	グループワーク及び振り返り
		13:00-14:30	送別会
		23:40	メルボルン空港 CX178 出発
9/5(木)	日本に帰国	7:10	香港国際空港 到着
		10:10	香港国際空港 CX506 出発
		14:55	関西国際空港 到着

しました。例えば、育児をしている看護師も自分の生活を考えながら勤務することができ、個人のライフスタイルを尊重して勤務することができます。このように、医療者が自分らしくいられるよう、自分の時間を有効に使うことができ、さらに協働するという意識を高く持っていると感じました。今後、看護師として働くようになった時には、看護師同士でサポートし合えるように、チーム間での協働を大切にしていきたいと思いました。

オーストラリアは多民族国家で、さまざまな国の文化が混在しているという状態にあります。そのため、異なる文化を持つ患者をケアする機会が頻繁にあります。それゆえ、言語・宗教等への対応も重要となるため、看護師には他者の文化について理解を深めていくことが求められます。そのためには、まず自分自身の文化について知ることが重要で、そうすることで他者の文化についての理解が深まることに気づくことができました。私も多くの文化を学び、これから出会う患者様の文化を大切にしながらケアができるよう意識を持ち続けていきたいと思いました。(学生 A)

## 2) 文化と看護

オーストラリアは多民族国家であり、さまざまな民族が生活しています。民族が違えば宗教や習慣が異なるため、それに応じた看護が求められるということを学びました。オーストラリアの平均在院日数は3.7日で日本より短いのが特徴です。入院しているのはケア依存度が高い患者が主で、それ以外の患者は在宅でのケアが必要となります。そのため、オーストラリアではHospital in the homeという制度が設けられており、在宅での看護というものが非常に重要視されています。

今回の海外演習で、オーストラリアの一般病院とホスピスを訪問し、そこではその人らしく療養できる配慮が多々見られました。例えば、一般病院・ホスピスともに個人の嗜好

や宗教上の理由(ベジタリアンなど)等が考慮され病院食が患者自身で選択できるようになっていました。ホスピスでは、オーストラリア独自の文化であるBBQができる設備の整備や紅茶・コーヒーが自由に飲めるように配慮されており、在宅に近い環境で看護が提供されていました。また、緩和ケアはオーストラリアでは基本的に在宅で行われていることから、ホスピスは症状コントロールのために一時的に入院をするところであり、人々もそれを望んでいるということも学びました。在宅看護では、住みなれた場所で患者がその人らしく生きられるように支援することが大切であり、それを可能にするのはHospital in the homeという制度であると知りました。

今回の海外演習で、日本以外の文化に触れ自分自身の文化について気付くことができました。日本から離れて生活してみなければ自分自身の文化について気付くことはできなかったため、他文化に触れ生活するということは私にとってとても良い体験となりました。あらゆる文化、考えを持つ人がいるということを念頭に置くことが看護する上で必要だと感じました。また、自分自身の看護に対する価値観や文化を知った上で異なる文化を持つ人のケアにあたることにより、自分自身の文化を押し付けず、相手の文化を尊重して看護できるのではないかと考えます。

今回の海外研修で得た学びは外国人の方への看護だけでなく自分自身と異なる文化を持つ日本人の方への看護にも当てはまる部分が多くあったため、今回の学びを今後の自分自身の看護に活かしていきたいと思います。(学生 B)



写真1 モナッシュ大学  
ペニンシュラ・  
キャンパスの  
ゲートにて

### 3) 緩和ケア

私は今回の国際看護学演習の自己課題の一つに「オーストラリアの緩和ケアや看取り看護において大切にされている事を知ることが出来る」ということをあげていました。モナシュ大学の緩和ケアに関する講義で、“Hospitium”, “Hospes” が温かくもてなすという意味であり、これらの言葉に関連した言葉にホテル、ホスピタル、ホステス等があることを学びました。オーストラリアの緩和ケアの定義は、「世界で最高の緩和ケアをすべてのオーストラリア人に」「緩和ケアは、亡くなりゆく人々に出来る限り可能な最高のQOLを実現し、その家族やケアに携わる人々をそのケアの最中から患者の死後まで援助することを目的とした専門の医療である」とされています。このことから、オーストラリアは緩和ケアに対し自信と専門の医療としての誇りを持っていることがわかります。

また、オーストラリアの緩和ケア病棟の見学では、自宅で過ごすことのできない患者の為に、自宅の雰囲気近づけるように病棟独特の白い壁ではなくグリーンの壁紙にされており、無機質な感じを出さないように手作りのタペストリーを飾っていました。さらに、職員の服装はユニフォームでなくても良い等の配慮もなされていました。これらは、患者を主体として考えられており、人生を自分らしく終えることを貫いている人たちに寄り添い、手を添えることを大切にしているためであることがわかりました。

この緩和ケアの学習を受け、私の緩和ケアに対する概念が大きく広がりました。それは、入院、通院をしているどの患者にも『喪失』や『悲嘆』があり、『緩和』を必要とする状態であることを理解することができました。このことから、看護師は人の最後の時でなくても患者の『喪失』や『悲嘆』を受け止め、『緩和』を試みることは大切であり、重

要なことであることがわかりました。これらオーストラリアで得た緩和ケアに関する学びから、緩和ケアは特別な人しかなることは出来ないと感じ、あきらめていた緩和ケアナース、看取りのナースになることを再び目指してみたいと感じることが出来るようになりました。

日本の緩和ケア病棟は、末期がんやエイズなど治療の困難な患者を対象にしたものとされています。現在の日本の医療制度では変えることは出来ないのかもしれませんが、緩和ケアはもっと広い場面で行われるべき事であり、疾病や病状の進行などに限定されずどのような面でも行われるべきであることを理解できた者として、臨床に出てからもこのことを忘れないようにしたいと思いました。また、機会があればこれらを提案出来る看護師になりたいと思います。

私は、今回の国際看護学演習では、五感を使って情報収集を行いました。実際に見たこと、聞いたことを流してしまうのではなく、少し深く考察することで自分との相違点に気づくことが出来る事も今回の演習を通して学ぶことが出来ました。今後も、物事を深く考察する事、創意の意味を考える事を続けていき、今後の自分自身に生かしていきたいと思います。(学生C)。



写真2 モナシュ大学構内での授業の様子

### 4) ホームステイ体験

私にとってこの海外看護研修は初めての海外であり、それゆえホームステイ体験も初



めてだったので、海外研修で唯一一人になるホームステイが一番の不安だった。海外研修に行った4人の学生は、ホストファミリー先が小さな子供のいる3人家族の家であったり、仕事熱心のファミリーであったり、高齢であっても毎日ボーイフレンドと仲良しなファミリーであったり、4人とも異なるタイプのホストファミリーだった。

私のホストマザーは話すことが好きで、毎日たくさんいろんな話や質問をしてくれる人だった。私は英語をしゃべるのが得意ではなく辞書などを使って話していたが、内心では物を使って話すことは失礼なことではないかと思っていた。けれど、ホームステイ先のファミリーは、辞書などを使って話す私のごちない英語を毎日一生懸命聞いて下さり、ホストマザーが話すときは、私にわかりやすいように簡単な英語を使って話をしてくれた。私はコミュニケーションがうまく取れなくて申し訳ない気持ちでいると話すと、ホストマザーは、「あなたが楽しいと思ってくることが私にとってうれしいこと。だから謝らないで。」と言ってくれた。ファミリーは言語的コミュニケーションだけでなく、毎日のご飯や、休日の外出、たくさんの愛情で包んでくれた。そのおかげで私はたくさん異文化にふれることができ、慣れない海外でも毎日楽しく過ごすことができた。私をありのままに受け入れて励まして下さったホストファミリーに心からの感謝の気持ちでいっぱいである。(学生D)



写真3 フランクストン市立病院にて

## VI. 研修成果と考察

### 1. 学生による研修プログラム評価・自己評価

研修参加学生4名に対し海外研修プログラム評価および自己評価に関する無記名アンケートを実施した。その結果を表6に記す。評価は4段階(1=不満～4=満足)で点数化した。学生による研修プログラム評価の平均スコアは3.7、自己評価の平均スコアは3.5、全体評価の平均スコアは3.7であった。

## VII. 考察

### 1. 海外研修の研修地

学生の研修プログラム評価についてのコメントを見ると平均スコア3.8であり、参加した学生たちはオーストラリアとモナシュ大学について大変満足していた。治安の良さ、恵まれた自然環境、多民族国家、日本とは異なる医療システムからの学びができるなど、オーストラリアは日本人学生にとって安心して意義深い研修のできる条件が整っている。また、到着後すぐにホームステイへの心構えや諸注意の説明があり、翌日にはホストファミリーとの会話を促進するための英会話レッスンや、モナシュ大学のキャンパス概要の紹介があるなど、プログラム全体のオリエンテーションが充実しており研修への導入がスムーズであった。

### 2. 研修費用と研修期間

学生たちは、研修にかかる費用についても、研修内容に見合っており満足していた。一方、学生たちの主な不満は研修期間の短さであった。期間については、大学のカリキュラムにより長期間の海外研修期間を確保できないこと、滞在の長期化により費用が高くなることなどの課題が生じる。従って、今後も研修期間を大幅に延長できる可能性は少ない。しかし、総合的な評価は高いことから、たとえ短期間の海外研修であっても、参加する学生の看護における多文化理解能力には大

きな影響力をもたらすことができると感じており、他大学でも同様の報告がなされている (Ballestas & Roller, 2013).

### 3. 研修プログラム：講義・施設見学・学生交流・ホームステイ

今回モナシュ大学が用意した学習内容は、オーストラリアの医療制度と看護、アボリジニの健康、緩和ケアの3部構成であった。それぞれについて熱心な講師の講義があり、少人数のため対話形式で進められたこともあり

学生の満足度はいずれも高かった。施設見学も講義と連動しており学生の理解を深める役割を果たしていた。一方、学生にとって評価スコアが低かったのは研修期間とモナシュ大学看護学生とのディスカッションであった。これらは、不満足というよりも、「もっと長く滞在したかった」、「もっと長く話したかった」、「もっと多くの学生と触れ合った」という要望が残った結果であった。また、ホストファミリーについては、学生は渡

表6 学生によるプログラムの評価・自己評価（評価基準：1=不満足～4=満足）

評価項目	平均スコア	主なコメント
<b>研修場所</b>		
オーストラリア	4.0	治安がよい/日本と異なる医療システム/自然が豊か
モナシュ大学看護助産学科	3.8	
平均	3.9	
<b>研修時期</b>		
8月26日～9月6日(10泊12日間)	2.8	期間が短い(全員) /あと2日はほしい
ホームステイ 3月19日～3月24日(5泊6日)		
ファミリー	3.8	熱心にコミュニケーションをとってくれた/日本人への理解があった/ファミリーによって時間の制約があった
ホームの環境	3.8	
平均	3.8	
<b>講義以外のプログラム</b>		
オリエンテーション 1日目2日目	3.8	キャンパスについて、英会話について/ホームステイについてそれぞれのオリエンテーションが役になった
キャンパスツアー	3.5	
英会話レッスン	3.8	
モナシュ大学生とのディスカッション	3.3	
お別れ会ファミリーとの Farewell teaparty	3.8	現地の学生と触れ合えてよかった/1人でなく複数の学生と触れ合った/もっと話す時間がほしかった
平均	3.6	
<b>講義</b>		
オーストラリアのヘルスケア制度	3.5	日本と異なるオーストラリアの医療制度/個々の文化を尊重する看護が学べて意義深かった
文化と看護	3.5	
アボリジニの健康	4.0	アボリジニについて深く学べた
緩和ケア	4.0	
死にゆく患者とのコミュニケーション	4.0	日本での学びを一歩深められた/ホスピス施設訪問もあり具体的な学びができた
研修全体のふりかえりセッション	4.0	振り返る時間がもてた/自分の成長を実感できた/自分の気持ちを素直に見る機会となった
平均	3.8	
<b>施設見学・授業見学</b>		
フランクストン病院	3.8	祈りの部屋など日本の病院との違いを学べた
ベニンシュラ緩和ケアユニット	4.0	ホスピスの温かい雰囲気的印象的であった
看護学科授業見学:フィジカルアセスメント	3.8	日本の教え方と違うことに興味をもった
平均	3.8	
週末アクティビティー(学生主催観光)	3.8	学生企画を実行でき満喫できた
研修費用 約32万円(うち大学奨励金7万円)	4.0	大学からの奨励金のおかげで安心して参加できた
プログラム評価 全体平均	3.7	
<b>自己評価</b>		
多文化理解	3.3	多文化に触れて自分の文化に気づくことができた
自文化理解	3.5	他文化と自文化のそれぞれの良さを認識できた/自文化がまだ十分理解できない
英語力/コミュニケーション力	3.0	短期間だが英語力の向上を実感した/チャレンジ精神が身についた
自立心	3.8	ホームステイ経験を通して自立心が高まった
積極性	3.8	研修の成功に貢献できるよう自分から動くことを学んだ/ホストファミリーとのコミュニケーションを通して積極性が身についた
全人的成長	3.8	英語力、自分の考えと行動など全てにおいてこの研修によって成長できた/夢が広がったと同時に自分の内面的問題にも気づかされ新たな課題ができた/自分の関心があった緩和ケアについて固定概念から大きく解放された
自己評価 全体平均	3.5	

航前に大きな不安を抱えていたが、全てのホストファミリーが学生を温かく受け入れてくれた。学生の乏しい英語力に対して熱心にコミュニケーションをとろうとしてくれた。そのため、学生の満足度は非常に高かった。モナシユ大学の研修プログラムを通した学びによって、学生たちは国際看護学演習の目的を十分に達成していたと言えるであろう。

#### 4. 学生の自己評価

学生たちの自己評価を見ると、スコアの高かった項目は「自立心」「積極性」「全人的成長」で、いずれのスコアも3.8であった。学生たちのコメントによると、ホームステイ体験において、見知らぬ人の中で生活するには自立した行動が求められたこと、言葉の壁を超えて自分からコミュニケーションをとる努力が必要であったことなど、日本の生活では直面しない危機的環境に置かれたことで、個々の学生の潜在的な能力や精神性が開花した様子が見受けられた。看護専門領域についても、例えば緩和ケアについて関心を持っていた学生は、オーストラリアにおける緩和ケアの概念を学び、日本で抱いていた固定観念から解放された。そのことが、学生自身の看護師としての成長とキャリア開発に繋がった。また、研修全体を通して学生たちは、自分自身の中にある固有の文化を再認識し、客観的に他者を捉える体験を得ていた。以上より、海外看護研修は多文化看護や国際看護の学びを目的とする研修ではあるが、学生にとっては、研修での専門知識を得ることを通して人間的にも成長する機会であると言える。

#### VIII. まとめ

本学の国際看護学演習の一環として実施した今回の海外研修は、学生の多文化理解や国際看護の学びにとどまらず、学生たちの視野を広げ、潜在的な自己能力を再発見し、今

までの自己を深く振り返り、未経験のことへ挑戦する機会となっていた。それは、学生にとって、一人の人間としての成長、そして看護職としてのキャリア開発へとつながる体験となっていることがわかった。研修プログラムならびに研修を受けた自分自身の結果に対しても満足度が高い研修となった背景には、この研修が単なるパッケージ研修への参加という単純な参加形式ではなく、3年次の国際看護学演習関連科目の履修、渡航前学習からの学習の積上げ、そして参加した学生自身の積極的な学びの姿勢が大いに影響していると考えられる。

#### IX. 今後の課題

この度の海外研修は、学生にとって満足度が高く、個人的な成長につながる有意義な研修ではあったが、このような研修を受ける学生が少ないということが本学における海外研修の最大の課題だと言える。今年度は、大学の海外研修奨励金制度が公表された時期が、研修申し込み締め切り日以降であったことは不運なタイミングであった。さらに、ゆとり世代の学生たちにとって安定した日常生活から、敢えて異なる文化や国・地域に飛び込み未知の世界へ冒険することは大きなチャレンジである。この世代の学生たちが海外研修に踏み出すには、大学や家庭を含めた周りからの精神的・経済的なサポートは大変重要である。

海外研修に参加する前の学生たちは、授業や実習に追い立てられる中で事前学習や渡航準備に取り組まなければならず、海外渡航への不安も募り、何度もくじけそうになっていた。しかし、いったん海外研修に参加すると、彼らの想像をはるかに超える収穫があったということ学生たちは身をもって学んだ。今後は、この海外研修が学生たちにもたらす成果を学内外に広く発信することで学生のみなら

ず保護者の理解を得て応募者を獲得すること、また大学側の理解を得て奨励金の必要性を求め、海外研修を軸とする国際看護学演習の授業が多くの学生たちにとってアクセシブルなものになるよう努めていきたい。

## 補 足

本文中の学生の文章ならびに写真は、当該学生の許可を得て掲載するものである。

## 文 献

- ・ Australian Institute of Health and Welfare Canberra (2011). Australian Hospital Statistics 2009-10. Retrived June 20, 2014, from <http://www.aihw.gov.au/WorkArea/DownloadAsset.aspx?id=10737418865>
- ・ Ballestas JC, Roller MC: The effectiveness of a study abroad program for increasing students' cultural competence. Journal of Nursing Education and Practice. Vol.3. No.6. 125-133.
- ・ Central Intelligence Agency (2013) : The World Factbook (2013-14 edition). Retrived June 20, 2014, from <https://www.cia.gov/library/publications/download/download-2013/index.html>
- ・ Frankston Visitor Information Centre: Retrived June 20, 2014, from <http://www.visitfrankston.com/>.International Monetary Fund(2014):World Economic Outlook Database. Retrived June 20, 2014, from <http://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2014/01/weodata/index.aspx>
- ・ 豪州統計局 (2012) : 2011 Census reveals Hinduism as the fastest growing religion in Australia. Retrived June 20, 2014, from <http://www.abs.gov.au/websitedbs/censushome.nsf/home/CO-61>
- ・ 豪州統計局 : Retrived June 26, 2014, from <http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/mf/3101.0>
- ・ Monash University (2012): Monash at a glance. Retrived June 20, 2014, from <http://www.monash.edu.au/about/glance/>
- ・ 日本外務省 (2014) : オーストラリア連邦. Retrived June 20, 2014, from <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/>
- ・ 日本外務省 (2014) : オーストラリア連邦. Retrived June 20, 2014, from <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/>
- ・ Stephen de Tarczyński (2008) : RIGHTS-AUSTRALIA: Apology To Stolen Generations-A Good Start. Retrived June 28, 2014, from <http://www.ipsnews.net/2008/02/rights-australia-apology-to-stolen-generations-a-good-start/>
- ・ The Group of Eight(2011) : Indicators of Australia's Group of Eight Universities. Retrived June 20, 2014, from [https://go8.edu.au/sites/default/files/docs/page/go8\\_indicators\\_final2013.pdf](https://go8.edu.au/sites/default/files/docs/page/go8_indicators_final2013.pdf)
- ・ The Times Higher Education Supplement (2013):World University Rankings 2013-2014. Retrived June 20, 2014, from <http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2013-14/world-ranking>